

日本語母語話者と学習者の学術論文における
接続詞の調査

Investigating Conjunctions in Academic Papers by Native Speakers and
Learners of Japanese

徐 衛

日本語母語話者と学習者の学術論文における接続詞の調査

蘇州大学交換教員 徐 衛

1. はじめに

日本語の文体について、「話し言葉」と「書き言葉」という二項対立がよく言われているが、宮島（1977）では、「文体の特徴からする単語の分類は、連続的であり、程度の差による」（p.873）と述べ、語を「俗語」、「日常語」（「くだけた日常語」「無色透明日常語」「あらたまった日常語」）、「文章語」という五種に分けている。日本語学習者にとって、文章全体の文体に合わせて語彙（単語）を適切に選択することが難しい。

本研究は学術論文に用いた接続詞に焦点を当て、収集したデータに対して、形態素分析を行い、接続詞の使用状況を計量的に調べ、日本語母語話者と日本語学習者の学術論文における接続詞の使用傾向と相違点のある程度解明することを目的とする。

2. 先行研究

田中（1984）では、文や語句を一定の意味関係・論理関係のもとに結びつけて、文脈や話線を展開していくうえで、接続詞や接続助詞の類が重要な役割を担っているとされている。また、書きことばと話しことばのみならず、文章ジャンルによって用いる接続詞が決まってくることも指摘している。

実際に用いられている接続詞の使用頻度や文章ジャンルによる接続詞の特徴に関する研究がみられる。土肥（1992）では、文字言語資料では逆接「しかし」、添加「また」が多く用いられ、自然科学分野の資料では順接「したがって」が多く用いられていると述べている。西（1995）では、新聞社説に現れる接続詞と接続詞的な機能を持つ語句の出現率を調査し、接続類型別の出現傾向は「逆接型」「添加型」「順接型」の順になっていると分析している。

また、浅井（2003）では、日本語母語話者と上級日本語学習者の作文調査し比

較して、次のような結果を得ている。母語話者より、学習者のほうが文と文のつながりに接続詞を用いることが多く、文の論理関係を明示的にしている。母語話者では、順接型の接続詞が少なく、ある事柄を拡充して展開していく方法を接続詞を用いているのに対して、学習者では文章を論理的な関係をはっきりわかるように示している。また、補助的用法の傾向が強い「また」「そして」「つまり」のうち、「また」は母語話者、学習者ともに多く用いていたが、「そして」「つまり」は学習者の方が多く用いていた。

これらの先行研究は日本語学習者の接続詞の使用に現れる特徴を見出すことには意義があると思われるが、硬い書き言葉における学習者の接続詞の使用特徴をさらに検討するため、今回は日本語母語話者と日本語学習者の学術論文に現れた接続詞を分析し、如何なる特徴があるのかを見ていく。

3. 研究の方法

(一) 調査の対象

a. 母語話者の学術論文

『日本語教育』128号～165号（2006年～2016年）に掲載された「研究論文」90本（総文字数約133.62万字）を選定した。

b. 学習者の学術論文

CNKI（中国知网）に収録された「日本語言文学」専攻の修士論文から、「日本語学・日本語教育」研究¹方向の修論を90本（2006年～2016年の期間、40の大学に¹渡り、総文字数約342.01万字）選定した。

(二) 調査の方法

選定した論文をテキスト化し、日本の国立国語研究所が開発したWeb茶まめ（安定版）²を利用し、形態素解析を行った。Excel形式の解析結果から「接続詞」

¹ 修論の総文字数は、「中文か英文の要旨」と「目次」部分の文字数が除外された文字数の集計である。

² Web茶まめ（安定版）が搭載した『現代書き言葉UniDic』という形態素解析器MeCab用の解析用辞書（ver.1603）では、品詞を15種類（補助記号・代名詞・動詞・副詞・接頭辞・接尾辞・連体詞・名詞・形容詞・形状詞・助詞・助動詞・接続詞・記号・感動詞）に分類される。今回の形態素解析に使用する辞書は「現代語」を選択した。

が検出された。誤差を減少するため、手作業でそれらの正確性を点検し、接続詞の計量データを確認した。

4. 調査結果と考察

形態素解析と計量によって、接続詞は母語話者の論文には自立語数17語、学習者の論文には自立語数18語が検出され、それぞれの出現数（延べ語数）も確認された。両者の調査結果を一覧的に示すと、表1のようになる。³母語話者の接続詞の延べ語数は3471語、学習者の接続詞の延べ語数は8716語であることが集計で分かった。

表1 調査結果の一覧

母語話者 (研究論文90本)			学習者 (修論90本)		
順番	接続詞	出現数	順番	接続詞	出現数
1	また	1032	1	また	2683
2	しかし	522	2	しかし	1100
3	および	433	3	そして	988
4	一方	253	4	あるいは	885
5	そして	239	5	および	818
6	さらに	202	6	すなわち	624
7	あるいは	179	7	さらに	354
8	なお	152	8	一方	348
9	ただし	151	9	ただし	180
10	すなわち	140	10	なお	170
11	かつ	86	11	しかも	163
12	もしくは	25	12	かつ	126
13	しかも	21	13	ただ	97
14	ただ	18	14	もしくは	71
15	さて	9	15	ないし	51
16	ないし	8	16	さて	40
17	もっとも	1	17	もっとも	17
—	—	—	18	つまり	1
合計延べ語数		3471	合計延べ語数		8716

³ 論文に出現した接続詞は、「および・及び」や「あるいは・或いは・或は」のように書字形が違う同一のものがある。以下では、「一方」以外の接続詞を平仮名の字形に示している。

調査結果のデータによって、母語話者と学習者の論文における接続詞の使用頻度、高頻度の接続詞および両者の異同をさらに考察していく。

今回の調査対象は各90本の論文であるが、総文字数の差がある。接続詞の延べ語数と総文字数の比率を見れば、両者の接続詞の使用頻度の状況がみられる。表2に示された通り、接続詞の延べ語数と総文字数の対比值は、母語話者のほうが0.2598、学習者のほうが0.2548であり、両者の差が小さい。先行研究の浅井（2003）では、日本語母語話者と上級日本語学習者の作文調査によって学習者のほうが接続詞を多く用いていたと述べているが、本調査ではそのような結果が見られなかった。すなわち、学術論文の場合は作文の場合と違って、学習者の接続詞の多用がみられない。

表2 接続詞の使用頻度の比べ

調査対象	論文の総文字数	接続詞の延べ語数	対比值 ⁴
母語話者の研究論文	133.62万字	3471	0.2598
学習者の修論	342.01万字	8716	0.2548

今回の調査で形態素分析を行い計量的に調べる方法を用いたので、調査で検出された接続詞は、論文の中の例文などに出現した可能性がある。その出現数が多い場合は問題ないが、出現数が少ない場合は結果分析に影響がある。そのため、次の分析は検出された出現数をもっとも多い1～10番の接続詞に集中している。

母語話者と学習者の使用頻度が高い接続詞の10語を表3に示してみる。

⁴ 対比值 = (接続詞の延べ語数 ÷ 論文の総文字数) × 100。

表3 使用頻度もっとも高い接続詞（10語）

母語話者				学習者			
順番	接続詞	出現数	比率	順番	接続詞	出現数	比率
1	また	1032	31.24%	1	また	2683	32.92%
2	しかし	522	15.80%	2	しかし	1100	13.50%
3	および	433	13.11%	3	そして	988	12.12%
4	一方	253	7.66%	4	あるいは	885	10.86%
5	そして	239	7.24%	5	および	818	10.04%
6	さらに	202	6.12%	6	すなわち	624	7.66%
7	あるいは	179	5.42%	7	さらに	354	4.34%
8	なお	152	4.60%	8	一方	348	4.27%
9	ただし	151	4.57%	9	ただし	180	2.21%
10	すなわち	140	4.24%	10	なお	170	2.09%
合計延べ語数		3303	100.00%	合計延べ語数		8150	100.00%

使用頻度をもっとも高い10語は同様であるが、パーセンテージからすれば、相違点がある。母語話者では、「また、しかし、および」という3語がもっとも多く、使用率が10%以上である。それに対して、学習者の使用率が10%以上の接続詞は「また、しかし、そして、あるいは、および」という5語である。そのうち、「また」と「しかし」は母語話者、学習者ともにもっとも多く用いていた。それは先行研究の土肥（1992）で述べた文字言語資料では逆接「しかし」、添加「また」が多く用いられたという結果とは一致している。

学習者が多く用いていた「そして、あるいは」という2語をさらに考察すると、その使用率がそれぞれ「そして（12.12%）、あるいは（10.86%）」であり、母語話者の「そして（7.24%）、あるいは（5.42%）」の使用率を多く上回っている。学習者の方が「そして」を多く用いていたということは、浅井（2003）の作文調査でも結果として述べているが、今回の調査で学習者の方が「あるいは」を多く用いていたことが分かった。

5. まとめと今後の課題

今回の調査と考察によって、以下のような結論が得られると思われる。

- i) 学術論文において、母語話者より学習者のほうが接続詞を多く用いている

ことがみとめられない。(本調査では、中国人学習者は接続詞の使用頻度が母語話者とほぼ同じであり、先行研究で述べたような作文調査による学習者のほうが接続詞を多く用いることがみられなかった。)

- ii) 学術論文において、接続詞「また、しかし、および、一方、そして、さらに、あるいは、なお、ただし、すなわち」という10語が比較的によく用いられている。そのうち、「また」と「しかし」がもっとも多く用いられている。
- iii) 学術論文において、母語話者より学習者のほうが「そして」と「あるいは」を多く用いている。

今回は学術論文における接続詞の使用から日本語母語話者と日本語学習者の使用特徴を見てきた。学術論文の言語的特徴をさらに明らかにするために、今回得られた結果をもとに、調査用母語話者と学習者のテキストをさらに拡大し、十分なデータのうえでの考察と検討が必要であると思われる。

今後、研究用母語話者と学習者学術論文のコーパスを構築し、学習者の頻度高い前20語を考察し、更に対比的考察をしていきたい。

【参考文献】

- 浅井美恵子 (2003) 「論説的文章における接続詞について —日本語母語話者と上級日本語学習者の作文比較—」『言語と文化』4 : 87-97.
- 伊藤雅光 (2002) 『計量言語学入門』大修館書店.
- 井上目次夫 (2009) 「論説文における語の文体の適切について」『日本語教育』141 : 57-106.
- 石黒圭 (2015) 「書き言葉・話し言葉と「硬さ／やわらかさ」一文脈依存性をめぐって—」『日本語学』34-1 : 14-25.
- 高野愛子 (2012) 「接続詞「だから」をめぐる文体差」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』38 : 39-66.
- 田中章夫 (1984) 「接続詞の諸問題—その成立と機能」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料 日本文法第4巻 修飾句・独立句編』明治書院.

- 土肥治美（1992）「公的な談話と論理的文章に表れた接続語句」『名古屋大学日本語学科日本語教育論集』3：35-49.
- 西由美子（1995）「新聞社説における接続表現の出現傾向」『国文目白』34：85-93.
- 宮島達夫（1977）「単語の文体的特徴」『松村明教授還暦記念国語と国語史』（明治書院）：871-903.